

第2章 保幼小連携・接続研修



平成 29 年 3 月、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、小学校学習指導要領が改訂（改定）され、就学前施設と小学校との「連携・接続」が一層重視されるようになったことは、前章で述べました。

第2章では、大阪市保育・幼児教育センターが、平成 30 年度と令和元年度の 2 年間に、「連携・接続」の推進に向け、幼稚園、保育所（保育園）、認定こども園、小学校等、施設種別を越えて、管理職や教職員に実施した研修（以下「保幼小連携・接続研修」と記載）を紹介します。

“学びの連続性と円滑な接続について学び、「連携・接続」の在り方を考える”ことを共通テーマにして、8名の先生方に講演をしていただきました。

第2章－1 平成30年度 保幼小連携・接続研修

1 「保育所保育指針の改定を踏まえた小学校への接続について」

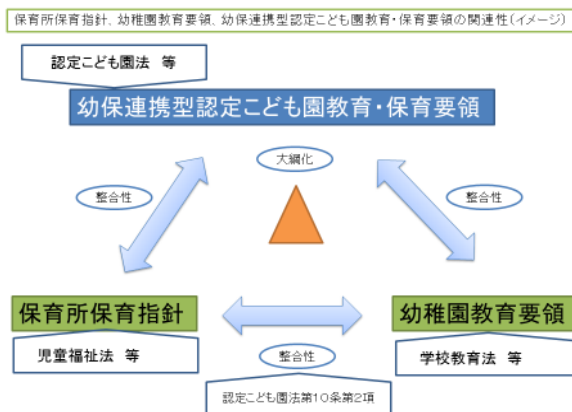
講師：聖和短期大学 馬場 耕一郎 准教授

実施日：平成30年6月12日・7月17日 会場：保育・幼児教育センター
(就学前施設教職員対象)

(1) 研修の主な内容

① 保育所保育指針の改定について

同時改定(改訂)(平成29年3月31日告示、平成30年4月1日適用)



(パワーポイント資料より)

子ども・子育て支援新制度（H27. 4. 1 施行）創設の背景・趣旨、及び制度の主なポイント、及び保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、小・中学校学習指導要領等（H29. 3. 31 告示）の改訂のポイントを分かりやすく解説していただきました。

保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の内容に整合性をもたせることで、同じように子どもの育ちを捉え、未来を生きる子どもの「生きる力」を育てていくことが大切だと共通確認されたことが、今回の改定（改訂）の大きなポイントであると分かった。

② 保育所保育指針の内容について

- 第1章 総則
- 第2章 保育の内容
- 第3章 健康及び安全
- 第5章 職員の資質向上

で述べられている内容を具体的に解説していただき、保育をする上で何が大切なのかということを改めて学ぶことができた。



たとえば、第1章総則「基本原則」では、「養護」における【生命の保持】と【情緒の安定】の理念を確認し、保育全体を通じた「養護」と「教育」の一体性が重要であると再認識できた。また、第1章総則「保育の計画及び評価」では、全体的な計画に基づき、どのように長期的・短期的な指導計画を作成していけばいいのか、そして、その計画を基にどのように保育を展開し、評価・改善を行っていくのか、ポイントを押さえながら話していただくことで理解を深めることができた。

2 「生活・遊びの学びで育ちつつある姿から小学校へ」

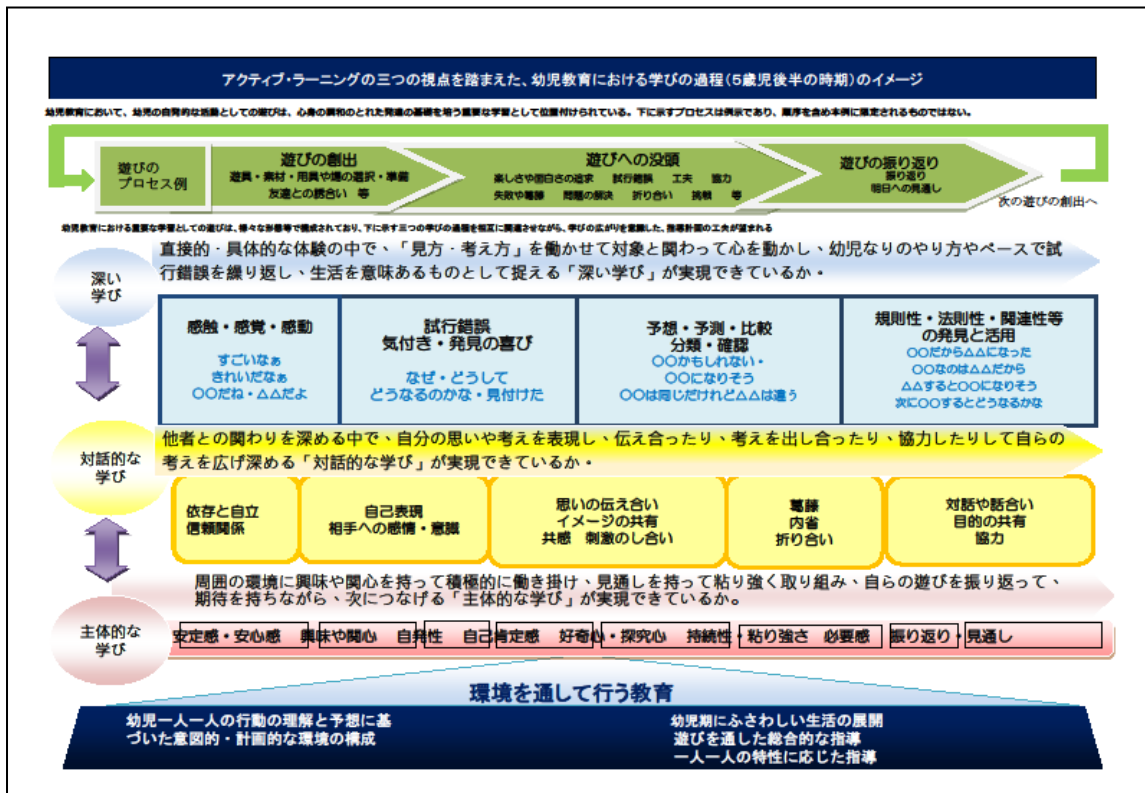
講師：大阪総合保育大学 学長 大方 美香 教授

実施日：平成 30 年 8 月 31 日 会場：大阪市立福島区民センター

(1) 研修の主な内容

① 要領・指針の改訂

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領等関係 3 法令と小学校学習指導要領を基に、それぞれの育ちの特徴や、「育みたい資質・能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」等、「保幼こ小」で共有すべき事項、「連携・接続」の必要性、重要性について話を聞くことができた。



(パワーポイントの資料より)

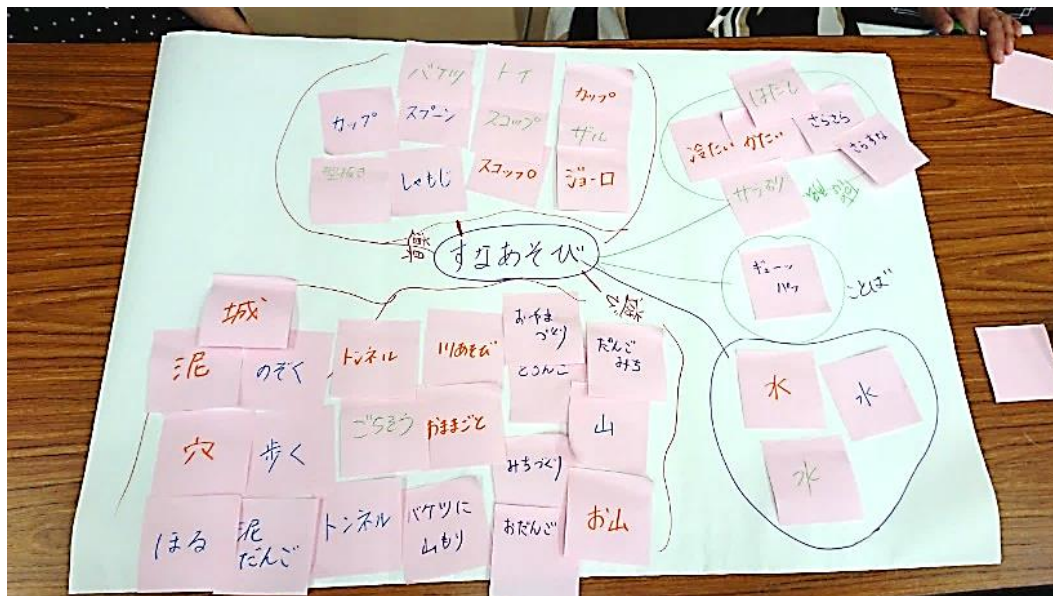
② 大人の生活が変わり、子どもの生活が変わった

実践にあたっては、指導者・保育者自身が、子どもを取り巻く社会の変化や生活の多様性について理解していくことが求められている。指導者・保育者がもつ知識や経験値が、子どもにとっても当たり前ではないこと、社会や家庭環境等子ども一人ひとりの生活文化的な差異を踏まえた教育・保育が必要なこと、生活が便利になっていくことで子どもが経験できることも減少していること等、子どもの生活や保育の現実を織り交ぜて話を聞くことができた。



③ グループワーク

就学前施設と小学校の教職員が混ざり合ったグループで、テーマとなる言葉（「買い物ごっこ」「砂遊び」など）に対して思い浮かんだことを自由に書き込むことで、それぞれの捉え方に違いがあることを知り、施設種別を越えた交流の機会になった。



(2) 研修後のアンケートから (参加人数 213 人)

- 理解できたか 肯定的回答 99 %
- 知識の習得はあったか 肯定的回答 100 %
- 活用できるか 肯定的回答 99 %

○感想

- ・昔とは子どもの育ちは違うと分かっていたが、一つ一つ細かく違いを考えることで、いろいろな違いがたくさんあることに気付いた。
- ・就学前に指導要録を使って何をしなければならないかとてもよく分かったし、小学校でも活用してもらえるように期待する。
- ・一つの遊びでも保、幼、こ、小ではイメージすることが違うと分かった。幼児期からの積み重ねをつないでいく大切さを改めて感じた。
- ・言葉だけでなく、生活や遊びを通して学んでいくのだと分かった。
- ・子どもを取り巻く環境の変化が大きい中、子どもにとっては、遊びから深い学びに移っていくことを日々の生活の中でしっかりと捉えていくことが大切で、就学に向けて子どもについて何を伝えていくことが大切かなど具体例をあげて話されたことや、施設種別を越えた話し合いが興味深く、今後必要だと分かった。
- ・施設種別を越えた情報交流の時間がもっとほしかった。

3 「就学前教育から小学校教育への接続 ～子どもの姿から学びと育ちを考える～」


講師：兵庫教育大学 溝邊 和成 教授

実施日：平成 30 年 9 月 21 日 会場：保育・幼児教育センター

(1) 研修の主な内容

〔10の姿〕は、それぞれのよう
な育ちの姿を示して
いるのか。学習指
導要領の改訂の方
向性(何を、どのよ
うに学び、何がで
きるようになるの
か。新しい時代に
必要となる資質・
能力)と、学びや育
ちの連続化に向け
た話を聞くことが
できた。

「10の姿」



豊かな感性と
表現

- ・生活の中で心動かす出来事に触れ、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりして、表現する意欲が高まるようになる。

生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、思いを膨らませ、様々な表現を楽しみ、感じたり考えたりするようになる。

生活や遊びの中で感じたことや考えたことなどを音や動きなどで楽しんだり、思いのままにかいたり、つくったり、演じたりなどして表現するようになり、友達と一緒に工夫して創造的な活動を生み出していくようになる。

自分の素朴な表現が先生や他の幼児に受け止められる経験を積み重ねながら、動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの喜びを感じ、友達と一緒に表現する過程を楽しみ表現する意欲が高まるようになる。

(パワーポイント資料より)

〔グループワーク〕

溝邊先生からの講話に続いてグループワークでは、〔10の姿〕のそれぞれについて、0～2歳児、3歳児、4歳児、5歳児、小学生(1・2年生)の姿が記入できる用紙を置いた机を巡りながら、日常見られる子どもの姿を書き込んでいった。

書き込みが一定終わったところで、各自が興味ある姿のところに集まり(就学前施設と小学校それぞれの教職員が混ざること意識しながら)、書き込まれた姿について、気付いたことや感じたこと、各施設での子どもの様子などを情報交流した。

その後、〔10の姿〕ごとに、グループでの交流内容について発表し合い、全体で共有した。年齢ごとの特徴や発達連続性への気付き、各時期に経験させたいことなどが発表された。



講師からは、発表ごと(姿ごと)に、年齢ごとの特徴や発達連続性、各時期で経験させたいこと等について助言していただくとともに、研修のまとめとして、今回の研修では〔10の姿〕について個別に子どもの実際の姿を交流し合ったが、それぞれの姿が互いにつながり絡み合っていることに言及していただき研修を終えた。

健康な心と体	
0.1.2 歳児	担任や特定の大人に甘えるから保育所生活を心地よくする。(保育所に来るとか先生大好き)(H.S) 大人の人に衣服の調節をしても、快適に過ごす。 よく食べるよく眠りよく遊ぶ。(N.W)
3 歳児	たくさん体を動かすのが好きなのだからおたくと人の気持ち、面白さ。(Y.A)
4 歳児	食べ物で苦手がもつてあつた。今でも食べると元気が出さ。病気になるバカバカしい。体って大事で食べると元気があつた。(Y.Y)
5 歳児	はやね・はやあき・あきごほん (M.A) 手洗いうがい、体がぐり (A.K) 自分の体について、無気力になり大人に伝えず基本的な生活習慣の見直し (K.M) 制服に依りて自分で衣服の調節をする (M.M)
小学生	自分の体調を自覚し朝の会などで伝える。(K.Y) 手洗いうがい週間の実施 給食を好む嫌むを伝える。(S.F)

かな感性と表現	
2 歳児	泣く・笑うなど、欲求で表現する 保育士や友達の子を見て真似入している。(A.O) 大人と共感する喜び。(S.Y)
歳児	重たい物を見てもね、こりかえをする 青空を見て「おそろきいいねー」と言う。(H.C) 電気が「かー(びやあつ)」「アスヤ」など見えてものを言っている。(S.O)
歳児	身近な虫(クワガタ)など発見したついでに身体表現として世界を伝える。(T.M)
歳児	糸を噛んだことを、いろいろな色を使って糸を描く。(M.A) 目に見たものを(いろんなものに見立て)イメージして言葉で表現する。(S.O)
小学生	自分が育てている植物を観察し、記録し感想を書く。(M.I)

(2) 研修後のアンケートから (参加人数 102人)

- 理解できたか 肯定的回答 98%
- 知識の習得はあったか 肯定的回答 98%
- 活用できるか 肯定的回答 96%
- 感想〔(小)：小学校からの参加者の感想〕

- ・小学校の先生と話す機会がなかったので、グループ討議で話が聞けたことが新鮮で参考になった。
- ・何気なくしている会話に人を育てる要素がたくさん含まれていることに改めて気付いた。
- ・幼保の違いや家庭環境の違いがある中、小学校ではどうしても一律に多数派を中心に進んで行ってしまうが、小学校の教員がもっと就学前の子どもの学びや育ちを知る必要があると痛感した。(小)
- ・0歳から小学校低学年までの子どもの成長が〔10の姿〕を基に見えてきた。
- ・幼保の先生方と教育について話し合うことが大切だと思った。(小)

4 「幼児期・児童期の『いじめの芽』と学校園のいじめ対策」

講師：大阪教育大学 戸田 有一 教授

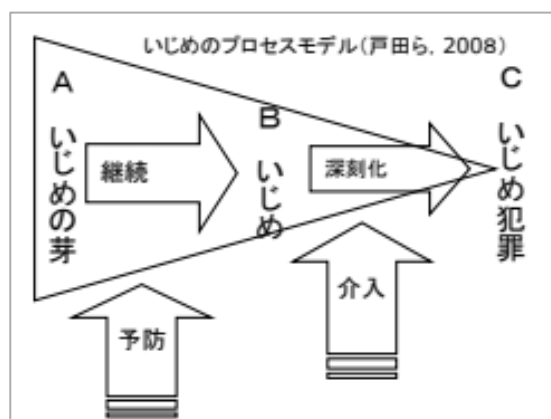
実施日：平成 30 年 12 月 17 日 会場：保育・幼児教育センター

(1) 研修の主な内容

幼児期の子どもたちの生活・遊びの中でのいじめの芽について、事例をもとに、大人として先生として、どのように子どもの姿や思いを捉えて、いじめ対策をとっていきのかという話を聞くことができた。海外でのいじめについての報告や日本国内での実践も紹介していただき、幼児期だけではなく、小学校や中学校でのいじめ対策の実践について、話を聞くことができた。

① 「いじめの芽は、0にはならない」

いじめの芽がいじめにつながる前に、個々での大人の対応が大事であるということから、大人の対応について具体的な話を聞き、参加の先生方から自施設での実践を紹介し合い考えた。



(パワーポイント資料より)

大人のいじめ対応姿勢5カ条

- ①いじめられっ子に非なし
(どんな場合でもいじめられっ子に寄り添う)
 - ②周辺こそがいじめの元凶
(いじめる子よりも周りの子への働き掛けが大切)
 - ③昨日と違うちょっとした様子こそ発見の決め手
(深刻な時ほど子どもは訴えないので、それに気づく感受性が必要)
 - ④いじめの輪から新たな輪へ
(既存の集団と異なる新しい集団や世界を提供する)
 - ⑤いじめっ子だって泣いている
(いじめっ子の抱えるストレスにも目を向けて)
- (阪根健二さん作成)

【グループワーク】

小学校の先生がグループに一人は入るように編成し、常磐会短期大学の^{しめだ}ト田真一郎教授の実践例から、担任としてどのように子どもたちに働きかけていくのか、意見交換をした。船長役の子どもの気持ち、船員役の子どもの気持ちを捉え、子どもたちに何を気付いてほしいのか、どのような子どもに育ててほしいのか等、熱い話し合いが行われた。

ト田先生の事例

- 5歳児クラスでの出来事
- 遊びの中でリーダーになることが多かったSくんが「船長さんごっこ」という遊びを考案。
- 「船の上では船長の指示・命令は絶対」
- Sくんの船長さんが五名位の船員を引き連れて、Sくんの意のままに探検。ずっとSくんが船長を独占。
- 担任としてこの不公平状態をどうしようか。

(パワーポイント資料より)

② 「気付き」「発信」を促す

先生の指示で、いじめをやめさせてもその場限りであり、先生のいないところではどうなのかということや、周囲の子どもが、これはおかしいと「気付き」、「発信」できるように先生が促していくことが大事であり、それによって即効性はないがゆっくりと集団が変わっていくという話を聞くことができた。

また、戸田先生が心がけていることを示され、就学前の取組もぜひ、小学校や中学校に広めていくことが大事であるという話があった。

最後に、「反いじめっ子ではなく、反いじめ」（罪を憎んで、人を憎まず）であることを踏まえ、子ども主体の実践で取り組んでいってほしいという話があった。

私が心がけていること

- いじめは発見しにくい
- だから「いじめの芽は常にある」ことを前提にした予防実践を行う
- しかし、カリキュラムには余裕がない
- なので、**合科的に実践**するなど工夫を
- 「訓示」のみの実践は、児童・生徒にとっては「うざい」「わかっている」
- なので、なるべく**子ども主体の実践**を

(パワーポイント資料より)

(2) 研修後のアンケートから (参加人数 102 人)

- 理解できたか 肯定的回答 93 %
- 知識の習得はあったか 肯定的回答 96 %
- 活用できるか 肯定的回答 95 %

○感想〔(小)：小学校からの参加者の感想〕

- ・「自分がいじめと思わなくても相手にとってはいじめかもしれない」と理解させることが大切。全校朝会で、子どもたちと話し合いたいと思う。(小)
- ・学校教育の抱える大きな課題を合同で研修する意義を感じた。幼・保の先生方と話し合えてよかった。(小)
- ・いじめの芽はどこにでもあるということを保護者にも伝えることが大切ではないかと思った。自分の保育を振り返り、子ども主体に見守りつつよい方向に導くことの大切さを感じ自所に持ち帰り共有したい。



- ・解決策を示すだけでなく、子どもたちに考えさせること、時間をかけることを大切にし、子どもがいじめをしない、止められる子どもになれるように、子どもたちと話し合っていきたい。

5 「幼児期の教育と小学校教育をつなぐ接続期カリキュラムの作成」

講師：奈良教育大学 横山 真貴子 教授

実施日：平成 31 年 2 月 21 日 会場：保育・幼児教育センター

(1) 研修の主な内容

① 学習指導要領等の改訂（改定）のポイント

社会の変化に対応できる子どもの育成、卒業後も学び続けていく力の育成があり、育ちと学びの縦と横のつながりを重視している。

重要項目に学校間接続があり、その時にしか学べないことをしっかり学び、無駄なくバトンを渡す。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の上に全ての教科があり、長い目で育ちを見て、育ちを喜んでいくことの大事さを聞くことができた。



② 接続の経緯と現状は

幼小接続は、以前より言われているが、なかなか進まない。何のためにするのか、どのような学びがあるのか、互いに理解できていない。幼児期に大事にされていることをどのようにつなげていくのか考えないといけない。

「連携・接続」に向けて、お互いのいいところを取り入れ、子どもに育ってほしいことは何かを共有して、できることを工夫する、できることから第一歩を踏み出す必要があることなどを聞くことができた。

③ カリキュラムの接続、接続期カリキュラム作成に向けて

幼児期は学びの芽生え、小学校教育は自覚的な学び。(遊びから教科学習へ) 遊びの中で、楽しみ・試し・工夫し・見通しをもつ、子ども自身が遊びを發展させていくことが学びである。

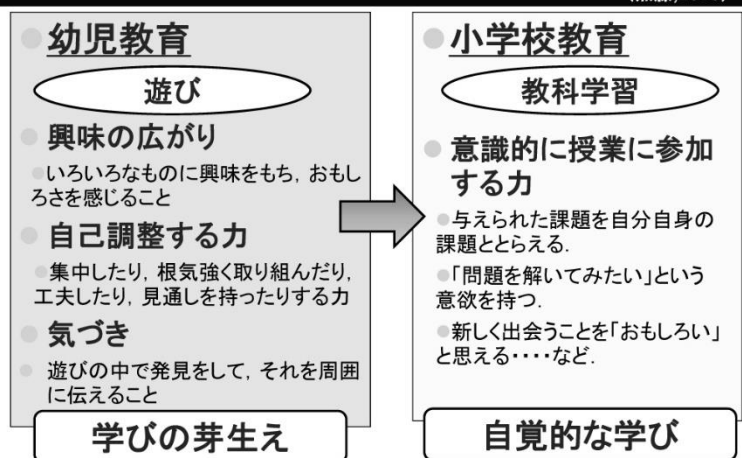
学びの芽生えをもたらす3つのポイントは、興味（興味をもつことが学びの第一歩）・自己調整力（自己発揮とコントロール、できないけどやりたい）・気付きと伝え合い。（協同的な活動につながる）

しっかり子どもを見て関心のありかを捉えることが「学びの芽生え」を促す出発点になる。子どもの姿から、次への支援・展開を考える。

2. カリキュラムの接続へ：

● 幼児期の教育から小学校教育への「学び」のつながり

(無藤,2013)



(パワーポイント資料より)

アプローチカリキュラムは、スタートカリキュラムに向けてつなぐ意識をもち、育ちの集大成として一人ひとりの子どもの育ちをつなぐ。

スタートカリキュラムは、入学直後のカリキュラム、幼児期の育ちの姿を踏まえて教育課程をつなぐ。子どもができる、分かることから始める。

接続期カリキュラムは、経験・環境・育ってきた力をつなぐことが求められる。つながりとは、それまでの育ち・学びを肯定し、その上に積み上げること。どんな力をつけて小学校につなげていきたいのか自分たちの幼児教育を見直し、学校が子どもを迎えるために、幼児教育側から発信する必要もあるなどの話を聞くことができた。

●まとめ

接続期から、誕生から18歳までの長期のスパンに

- 今回の学習指導要領等の改訂は、
 - 子どもの育ちと学びをつなぐ改訂。 18歳まで
一貫した教育
- 幼児期の教育と小学校教育を滑らかにつなぐためには、
 - 子どもを中心として、保育・教育を互いに見合い、対話し、相互理解を深める。 交換 尊重
- アプローチカリキュラム
 - 興味 自己調整力 気づきと伝え合い
- スタートカリキュラム：子どもの経験・環境・育ってきた力（幼児期の終わりまでに育ってほしい姿）をつなぐ。
 - 考える 対話する 個人差に配慮

(パワーポイント資料より)

[グループワーク]

- ◆ 今、あなたの自校園所の連携・接続の取組はどのステップにありますか。
- ◆ できることから始めるとしたら、どんな第1歩を踏み出すことが可能ですか。



(2) 研修後のアンケートから (参加人数 95人)

- 理解できたか 肯定的回答 97%
- 知識の習得はあったか 肯定的回答 97%
- 活用できるか 肯定的回答 98%

○感想 [(小)：小学校からの参加者の感想]

- ・小学校の教育内容を先取りして準備するのではなく、幼児期に育てたい姿を意識し、今できることは何かを考え、保育していくことの大切さが分かった。
- ・今何を大切にしたいのか、就学前は一人ひとりのペースに合わせる、一人ひとりに寄り添える今だからこそ、活動内容を考えていきたい。
- ・子どもたちが遊びを広め深めていけるような保育を大切に、保育の幅を広げていきたい。
- ・もっと小学校との交流をしたいと職員間で話しながらも、結局できていなかったなので、今回の研修を機に、こちらからコンタクトを取らせてもらおうと決めた。
- ・小学校教育を進めるにあたり、幼児期にどのように学んできたかを知ることが重要と改めて思い、幼児期の育ちを見る視点は、小学校でも必要な視点だと思った。(小)
- ・どんな力が育ってほしいのか、まずは自分の保育を振り返り見直そうと思った。今日の学びを職場でも共有し考えていきたい。